

## ウガンダ経済の復興と東アフリカ地域経済

著者	吉田 栄一
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) <a href="http://www.ide.go.jp">http://www.ide.go.jp</a>
雑誌名	アフリカレポート
発行年	1999-03
出版者	日本貿易振興会アジア経済研究所
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2344/00008390">http://hdl.handle.net/2344/00008390</a>

# ウガンダ経済の復興と 東アフリカ地域経済

吉田 栄一

1998年5月にパンアフリカ通信社はUSAIDの東アフリカにおける経済予測を報道し、近年堅調な復興をみせるウガンダ経済と不正腐敗に満ちたケニア経済の地位が2000年には入れ替わる可能性があることを伝えた。同様の観測記事は初めてのものではなく、ウガンダの経済復興が軌道に乗るならば東アフリカにおける地域経済の構造は大きく変容することが各方面で予測されている。

本小論では、最近のウガンダ経済復興の状況と、1994～96年のコーヒー景気との関係、コーヒー景気後の経済動向について東アフリカ各国との比較を通して検証してみる。

## 1 コーヒー景気

アフリカのコーヒー主要生産国であるコートジボワール等では、樹木の高齢化により、その単位収量低下のケースが散見されるなかで、ウガンダではコーヒーマーケティングボードの解体、コーヒー市場の自由化と農園の民営化が効を奏し、元来のロブスタ種の植え替えやアラビカ種栽培地域の拡大が進んで近年堅調に生産回復している。ウガンダのコーヒー輸出は1972年の21.4万トスがピークで、70年代後半から80年代前半にかけて内政不安定な期間には収穫が30%減少した。その後、作

付け面積の拡大や市況の短期的好転などによって回復し、95年以後は72年に記録していた20万トスの輸出力を回復している。

ウガンダ政府はブラジルの天候不順によってもたらされたコーヒー景気が国内金融へ与える影響を抑えるために、インフレ回避、国内貯蓄拡大、適切な財政投資そして十分な外貨準備確保等の点に留意して金融政策を遂行してきた。

1994年以後、通貨供給量(M<sub>2</sub>)の対前年比増加率はコーヒー景気前の93年(35.7%)より抑制されており、94年以後は15.0%、17.3%、11.3%となっている。また消費者物価指数(CPI)は94年から97年にかけて10.0%、6.6%、7.0%、10.5%と非常に落ち着いて推移している。外貨準備と国内貯蓄の増加も堅調で、外貨準備は90年には0.7カ月分であったが95年と96年には3.8カ月分にまで増加しており世銀勧告が提示した4カ月分の目標量に近づいている。また国内貯蓄については国内の商業銀行網の脆弱な営業基盤は否めないが、それでも1991年から97年にかけてケニアで対GNP比20%から半減しているのに対し、ウガンダでは急増している。

世銀はブーム時におけるコーヒー生産のGDP寄与率を直接、間接の影響を含めて24%と試算し、さらにブームの終息を1997年と予測していたが、

表1 東アフリカ各国の国際収支

(単位: 対GNP比は%, それ以外は100万米ドル)

		1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997
経常収支	ウガンダ	-169.8	-99.6	-224.3	-207.5	-338.9	-252.3	-387.8
	ケニア	-213.3	-180.2	71.2	97.9	-480.1	-166.4	-454.1
	タンザニア	-737.5	-714.2	-1,048.0	-710.9	-646.3	-510.9	-707.4
貿易収支	ウガンダ	-203.9	-270.7	-278.3	-251.2	-366.5	-347.6	-466.9
	ケニア	-511.9	-500.2	-247.0	-238.4	-738.1	-510.3	-883.4
	タンザニア	-867.0	-928.8	-857.1	-789.9	-657.5	-449.0	-449.1
移転収支	ウガンダ	329.0	468.5	312.4	473.1	581.9	674.7	619.6
	ケニア	396.7	392.9	276.0	333.7	465.1	473.8	554.9
	タンザニア	504.5	650.1	389.8	311.5	370.5	370.9	245.4
政府開発援助	ウガンダ	616.8	727.2	612.4	753.3	829.7	677.5	n.a.
	ケニア	921.2	886.4	910.7	676.5	731.7	606.1	n.a.
	タンザニア	1,083.3	1,343	953	969	882	894	n.a.
無償資金	ウガンダ	371.2	421.2	458.1	384	443.6	478.4	n.a.
	ケニア	640.9	659.6	552.1	503.8	463.4	400.5	n.a.
	タンザニア	913.8	934	1,025	776	717	695	n.a.
国内総貯蓄 (対GNP比)	ウガンダ	0.7	0.4	1.1	4.3	7.1	5.4	7.9
	ケニア	20.0	17.6	22.4	22.4	15.9	16.3	11.4
	タンザニア	-0.6	-1.6	-2.8	-2	0	3.4	n.a.
海外直接投資	ウガンダ	1	2	4	5	2	113	160
	ケニア	19	6	2	4	13	36	6
	タンザニア	10	15	62	63	104	134	n.a.
外貨準備/ 月当輸入額	ウガンダ	1.0	1.7	2.3	4.2	3.8	3.8	n.a.
	ケニア	0.6	0.4	2.1	2.5	1.2	2.5	n.a.
	タンザニア	1.4	1.9	1.1	1.7	1.4	2.3	n.a.

(出所) *International Financial Statistics*, Volume LI, Number 12, Dec. 1998, International Monetary Fund; *Global Development Finance 1998*, March 1998, The World Bank; *Country Profile Kenya 1998-99*, *Country Profile Uganda 1998-99*, *Country Profile Tanzania, Comoros 1998-99*, The Economic Intelligence Unit; *African Development Indicators 1998/99*, Oct. 1998, The World Bank.

これは結果的に概ね妥当であった。93年に1.2<sup>ドル</sup>/kgであったウガンダコーヒーは94年には3.55<sup>ドル</sup>/kgに高騰したが、97年には1.56<sup>ドル</sup>/kgに低下している。97/98年度はウガンダでもエルニーニョ現象の影響で、前年度に比較して-17%の収穫減となりコーヒー景気は収束した。

結果的にコーヒー景気によるインフレ圧力の抑制と近年の内政安定化は、移転収支増加をもたらした。次項ではこの点を含め、経常収支と貿易について触れてみる。

## 2 経常収支と貿易

1991年から97年の東アフリカ3カ国の貿易をみ

ると、輸出額の伸長はケニアが1.73倍(ドルベース, 以下同じ)で、タンザニアは1.97倍である一方で、ウガンダは3.3倍の膨張を見せている。ただし、貿易収支ではウガンダの貿易赤字は増加傾向にある。一方で、タンザニアは貿易収支が-8億6700万<sup>ドル</sup>から-4億4900万<sup>ドル</sup>へと改善している。これはウガンダの復興が生産財・消費財の輸入増加をもたらしていることが原因と考えられる。特にケニア製品の対ウガンダ輸出は91年比で約4.5倍と急伸している。

また、ケニア、タンザニアに比してウガンダへの政府開発援助資金の安定流入は、ウガンダの安定した内政状況、アメリカの対スーダンおよび対

コンゴ政策における地政学的位置づけ、そして構造調整の受け入れによるものである。

ケニア、タンザニアでは無償資金流入が1992年に比較して減少しているが、ウガンダでは94年を除き一貫して4億ドル台で安定している。またアフリカでは最も早く、重債務貧困国（HIPC）支援プログラムによる6億5000万ドルの支援パッケージを受けることも決定している（表1）。

移転収支を見るとその収入額は伸長率ともに3カ国中ウガンダが最大である。タンザニアの移転収支額は漸減しており、1991年に対し97年には2分の1以下になっている。ウガンダへの資金流入は民間資金にも現れており、タンザニアではほとんどゼロに近づきつつあるその流入が、ウガンダでは約4倍の伸びを見せている。実際、96年の対ウガンダ移転収支はサブサハラにおいてナイジェリアに次ぎ、ケニアと並んでおり、97年の直接投資ではサブサハラで第6位、4.5%を占めている。

最近の対ウガンダ直接投資は在ケニア多国籍企業のウガンダ進出および現地生産化、第2に南ア企業の大陸市場進出、第3にアミン政権時に流出したインド系企業の資金還流と分析されている。

ケニアから販売拠点や生産機能を移転した企業例としてはユニリーバ、シェル、ペプシ、カルテックス、ジェネラルモーターズ、ロンロ、コルゲート等がある。これらの立地のプル要因としてはウガンダ国内での消費量増加とウガンダ経済の長期的安定成長が挙げられ、またプッシュ要因としては二国間の流通経路の治安問題、ケニア側の内政不安が考えられる。また政府レベルで急速に進展している東アフリカ経済共同体が予定どおりに1999年7月に発足し、近い将来に3カ国間の関税障壁が撤廃されれば、東アフリカで最大の人口集積地であるナイロビ・カンパラ回廊において、電力供給がより廉価で、用水もナイロビ近郊よりも豊

富で、かつ地価も低いウガンダ側に生産配置が進むのは立地論的には当然である。

また、コココーラの発表した首都カンパラとルワンダ国境に近いムバララへの工場配置計画は、内政安定後のルワンダ、ブルンジおよびコンゴ東部への流通を目論んでいると思われる。南アの電気通信企業MTNは1998年10月のカンパラ進出を機に、タンザニア、ケニア、ブルンジに進出する計画を発表している。さらに南アブルーワリーは、97年に投資協力を要請されたウガンダ・ナイルブルーワリーの40%株式取得によってウガンダでの地歩を固め、同時にケニア工場の建設に着手している。

以上のような例に見られるカンパラの拠点性増加についての詳述は別の機会に譲りたいが、流通経路としてモンバサ港を必要としない産業についてはカンパラに直接進出し、そこを拠点に東アフリカ展開する事例が増えると思込まれる。

このような動きにともない、1991年時点では皆無に等しかった南アの東アフリカ3カ国への輸出は、97年には対ケニア3億5300万ドル、対タンザニア2億0800万ドル、対ウガンダ3500万ドルに増加している。

### 3 非伝統産品輸出

近年注目を集めている非伝統産品輸出は東アフリカでも貿易収支の改善に貢献している。ウガンダの非伝統産品輸出はケニアと類似しており、バラを主とする切り花や油料種子、ナイルパーチ・ティラピア等の冷凍魚、乳製品、皮革、バニラの輸出が伸びている。ただしケニアの園芸作物輸出が1993年以後は一貫して紅茶、コーヒーに次ぐ3位の輸出額を維持しており、97年には約2億3440万ドルを稼得しているのに比し、ウガンダでは園芸作物の主要部分を占める切り花と青果を合計して

表2 ウガンダ・ケニアの競争する非伝統産品輸出  
(単位:淡水魚はトン,それ以外は100万ドル)

		1993/94	1994/95	1995/96	1996/97	1997/98
皮革	ウガンダ	6.73	10.41	8.86	7.84	12.55
	ケニア	15.1	23.2	6.4	1	2.9
青果類	ウガンダ	13	13.8	16.9	17	17
	ケニア	109	130.4	134.8	150.3	147.2
胡麻	ウガンダ	2.8	1.5	5.9	7.4	7.4
	ケニア	7.6	3.9	3.2	3.8	2.7
淡水魚	ウガンダ	5,820	8,640	13,650	11,580	10,530
	ケニア	17,432	18,512	15,511	18,769	17,438
切り花	ウガンダ	n.a.	2.02	5.36	5.25	8.27
	ケニア	42.8	47	70.9	76.5	83.5

(出所) FAOSTAT database (<http://apps.fao.org/cgi-bin/nph-db.pl>), *Background to the Budget 1998/99*, June 1998, Ministry of Finance, Planning and Economic Development, Uganda, ケニア花卉協会へのアンケート調査結果(1999年2月2日)およびJETROナイロビ事務所資料。

もいまだに2530万ドルにすぎない(表2)。

花卉業者はケニアから技術、資金、契約自体をフルセットで持ち込んでおり、ウガンダでは非ウガンダ人ビジネスという印象が強い。主要流通経路である航空便は、ウガンダ(エンテベ)発の定期ヨーロッパ便が週8便であるのに、ナイロビ発は45便であるほか、貨物専用便もロンドン2便、フランクフルト6便を擁し至便である。エンテベ発のカーゴ輸送能力についてアライアンス航空は、「ウガンダでは急増する航空貨物を賄えておらず、企業のなかにはナイロビ経由で輸出する業者も存在している」と指摘している。貨物がナイロビを経由する限りにおいて輸送コストでウガンダは不利である。

その他ではトウモロコシ・豆類(東アフリカ市場向け)、皮革(ヨーロッパ向け)、胡麻・バニラ・除虫菊(ヨーロッパ・中東・日本向け)の生産輸出が伸びているが、ケニアの非伝統農産物に比べると種類、生産量ともに非常に限られている。また、各産品は次のような問題を抱えている。例えばトウモロコシ、豆類の輸出需要はケニア・タンザニ

ア市場に依存しているため、隣国の気候条件に左右される。淡水魚の海外市場は伸長しているが、ホテイアオイの異常繁茂、沿岸でのコレラ流行によるヨーロッパ市場での輸入禁止措置、不安定な漁業資源、冷蔵庫および冷蔵車普及といった流通近代化等の課題がある。皮革関係は販路を拡大しているが品質改善を迫られているし、バニラ市場では、人工バニラの流通量が天然物より多く市場拡大があまり期待できないといった課題が山積している。

#### 4 今後の展望

以上ウガンダ経済復興をコーヒー景気、經常収支、直接投資拡大、非伝統産品輸出拡大の点から見てきた。ケニア経済を凌駕すると言われながらも、伝統産品のコーヒーは漸くアミン政権期以前のレベルに戻った程度で、紅茶生産は近年で記録的であった1996/97年でも72年の77%にすぎず、綿花は70年の23%しか生産していない。非伝統産品の輸出はケニアの二番煎じの色彩が濃く、その命綱となる航空貨物便はナイロビの方がはるかに至便である。工場誘致条件には若干の優位性があるものの、東アフリカ3カ国で近年最もウガンダに優位に働いているのは移転収支、特に政府開発援助資金に他ならない。

ウガンダ経済復興の課題は、援助資金が制限されて民間資金流入も減少しているという特殊な状況下のケニアとの地位交代といった視点からではなく、アミン政権以前の状態にいかにして早く到達するかこそが第1の課題であり、それと同時に、生産配置上の優位性を今後いかにして発揮できるかという点にあるといえよう。

(よした・えいいち/地域研究第2部)